短編小説

兄の線香花火

伊藤亜希子

最後にやるために、尻のポケットに入れておいた線香花火を、一本一本ブロックの上に並べていく。

兄が口を開いたのは、僕が線香花火に火をつけたときだった。

ここ二、三日の朝晩は涼しかった。昼間だって、随分と過ごしやすくなってきている。

外が暗くなったのを見計らって、花火を持って庭に出た。学校のプールで何時間も泳いだ帰りに、友達と神社の祭りに行った。そこのくじ引きで五等を当てた。その五等が、この花火だ。

バケツに水を入れて、ろうそくに火をつけた。ろうそくを斜めにして、ブロックにろうを二、三滴垂らす。まだ熱いろうの上に、ろうそくを立てて固定する。ずっと前に、父がそうするのを見て、それで覚えたことだった。

あと一週間で、夏休みは終わってしまう。別に休みが終わるのはかまわない。朝はラジオ体操に行くために早く起きなければならなかったし、学校で行われる水泳はほぼ毎日あった。夏休みであろうとなかろうと、家にいる時間はそう変わらなかった。

ただ、夏が終わるのが悲しかった。夏休みが終わると、昨日までの一ヶ月間が嘘だったかのように、何か虚しい空気が流れ出す。水泳パンツにも、虫捕り網にも、僕の見ることのできるどこにも、もう夏の気配は残っていないのだ。

細いろうそくが溶けてしまわないうちにと思い、ビリビリと乱暴に、セロハンテープで固定されている花火を、台紙から引き剥がした。

何本もの花火とくっついている長いセロハンテープに苦戦していたとき、仕事帰りの兄が現れた。

「子供が一人で花火をしちゃいけないんだぞ」

兄は、少し疲れたようにそう言った。

僕は黙って、最初の花火に火をつけた。そしてなんとなく残りの花火の山を、兄の足元に近づけた。

兄のことを好きか嫌いかと聞かれたら、嫌いだった。兄は穏やかで、優しい人間だった。でも穏やかで、優しいだけの人間だった。僕には兄が、兄の過ごす毎日に何を感じ、どう考えているのかが分からなかった。それどころか兄は、過ぎてゆく昨日や今日に、何も感じず、どうとも考えていないようにさえ思われた。

シュシュシュシュと鳴る花火を持って立ち上がった。兄から離れた所に行って、花火を持っている右手を、ぐるんぐるんと回した。

兄は、僕がそうするのを黙って見ていた。ネクタイを緩めて、玄関に敷かれているレンガに、砂をはらいもせずにゆっくりと腰をおろした。そうやって、僕が回す花火が、暗闇に残す赤い軌道の残像を、瞬きもせずに見ていた。

終わってすぐの花火をバケツの中に投げ入れると、ジュッといって白い煙を出した。次の花火を取りに兄のほうへ走った。

「やってもいいよ」

僕はそう言って兄の顔を見た。その顔はなんだか蒼白く、その中に僕を映す瞳も、僕とはちがう遠く

を見ているようだった。花火を差し出しても、兄は口元で笑うだけで受け取ろうとはしなかった。

昨日兄は、いつもそうするように、母さんの背中を擦っていた。僕が新しい学年になってすぐのころから、母さんは理由もなく泣き出すようになった。そうなる前までは別に、何ともなかったのに。父さんが家に帰らない日が何日も続いても、明るく笑っていたのに。

確かにその笑顔は、昔見たそれとは随分ちがうものだったけれど、昔より何度も食器を洗うようになったし、何度も風呂場の鏡を磨くようになった。僕が家から遊びに出ても、夕方になって帰ってきても、それに気がつかないくらいに、母さんは忙しくしていた。

そんなふうにして母さんは、僕のことを見ないようになっていった。

そして今母さんは、泣くことに忙しいみたいだった。一日に何度も泣いていた。母さんが時折思い出したみたいにすすり泣く声に、驚くことは何度もあったけれど、すすり上げるのに合わせて揺れる背中を見て、悲しいと思ったことはなかった。

仕事から帰ったばかりの兄にしがみついて母さんは泣きわめく。繰り返される毎日に、兄はたじろぎもせず母さんの背中を擦っていた。僕はその様子をじっと見つめていた。僕は、そうする兄の穏やかさが、悲しかった。

兄はいつの間にか、そっぽを向いてうなだれていた。僕がまた花火を取りに近づくと、兄は顔を上げ、でもやはり、兄の右側に広がる暗闇を見ていた。

僕は、花火を選ぶふりをして兄の横顔を見ていた。若い兄の、すがるような眼差しを、僕はそのとき初めて見た。

兄は、仕事帰りにスーパーに寄ると、三人分の弁当を買ってくる。僕や母さんが好みそうなものをちゃんと選んできてくれる。

兄は決まって、一番最初に僕に弁当を選ばせてくれた。僕の好きな唐揚げと肉団子が別々の弁当に入っていたら、それを取り出してどちらも僕にくれるのだ。

僕が弁当を食べ始めたのを見ると、僕に笑いかけて兄は二階へと上がっていく。

僕は、兄の手に止まろうとしていた蚊を追い払っ

た。兄は、「ありがとう」と言って笑った。
花火の下に敷いていた台紙や、ぐるぐるに丸めて投げておいたセロハンテープを、花火が納まっていた袋に入れてブロックの横に置いた。丈の長い花火たちは全部、水の入ったバケツに浮いている。両手でパッパとブロックの上の砂を払った。そこにポケットから取り出した線香花火を一列に並べていく。終わりの近づく夏を惜しむようにして並べていく。
一番右端にあるのをつまみ上げて、火をつける。ろうそくの上にかざされた線香花火の、先の紅く膨らんだ部分が、じゅくじゅくと丸くなり上にのぼっていった。オレンジ色になったじゅくじゅくが、ヂ、ヂ、といって小さな火花を散らし始めた。
明かりのついていない二階の部屋から、母のすすり泣く声がかすかに聞こえてきた。
兄は次第に勢いを増していく火花を見つめて、並べてある線香花火に手を伸ばした。
兄の線香花火は、バチバチバチと普通のよりも激しく燃えた後、下に落ちることなく縮んで、真っ黒に固まってしまった。
母さんの泣き声は、止みそうもなく続いていた。兄は、冷えてゆく線香花火の残骸を、じっと見つめていた。
逃げてしまいたいんだろうか、と思った。父さんのように、逃げてしまいたいんだろうか、と思った。
兄は僕の視線に気づいて、線香花火をバケツの中に入れた。線香花火は音も立てずに、水に浮かんでいた。
兄は立ち上がって尻の砂を払った。そして、家に入るため、くるりと僕に背中を向けた。
「兄ちゃん」
僕は兄を呼び止めた。潰れてしまいそうな兄を、呼び止めた。
兄は、何かを察したように、僕に近づいてきた。そして、僕の頭に手を置いた。
「母さんはね、病気なんかじゃないんだよ。今、少しの間子供に戻っているだけなんだよ。頑張って、疲れたから、誰かに甘えたいだけなんだよ」
兄はぼんやりとどこかを見つめて、独り言のように僕に話しかけた。兄の、この透けるような穏やかさは、僕の心をしめつける。
「だから、母さんがそうしている間は、母さんが子供でいる間は、兄さんが大人になってあげないといけないんだ」
そう言って、兄は再び玄関に向かって歩きだした。
「変だよ」
僕は思わず、兄の背中につぶやいた。兄は「えっ」と言って振り向いた。その表情は驚いたまま固まっていた。
「何かそれって変だよ」
さっきよりもはっきりと、兄に話しかけた。優しい兄をにらみつけるようにして、きゅっと唇を噛んだ。でも僕の声は、その表情とは裏腹に、かすかに震えていた。
兄の顔は、驚きの表情を崩して、みるみる曇っていった。そうして僕を、ぞっとするような目で見ていた。僕はもうそれ以上、何も言えなくなってしまった。僕が嫌いだった兄の穏やかさは、今は欠片もなかった。
「変って、お前……」
それは、僕の知っているものではなかった。僕が耳にしたことのない、兄の、冷たい、低い声だった。
「僕は……お前のために……俺は……必死に学んだんだ。母さんを、親だと思わなければいいって、そう答えを出した。愛のないこの家で、必死に学んだんだ」
兄の顔は、僕の方を向いていたけれど、その焦点は合っていないように思われた。兄はドアノブに手をかけると、うつむいたまま笑った。笑いながら「変か……そうだな、やっぱり、変かな……」とつぶやいた。
僕は暗闇に浮かぶ兄の顔を見ていた。兄の笑顔は、泣いていた。
僕はしゃがみこんだまま、しばらくじぃっとしていた。兄が捨てた線香花火は、水を吸って膨張し、ゆらゆらと沈んでいった。僕は、残っていた線香花火に火をつけた。小さな火花を見つめながら、さっきまでの兄の姿を思い出して、僕は涙を流した。

（いとう・あきこ／国文二〇〇六年卒業）

■

出雲の阿国座

いずも おくにざ

ひらかわ あや

!
さっきの…
よかったな、國
お前の評判を聞いて来て下さったんだと
あっそ
!!?
え…？
ちょっと…
今なんて…？
ああ、紹介しますね
彼がうちの座の看板役者の國ですよ
ぐい
…なんか文句あんのかよ
國（阿国）
じゃあ山三さんは明日から稽古に出てもらうということで
パタン
あ…ハイ
…
か、瓦版見たときは女性かと思いましたよ
はぁ？
瓦版に載ってんのは絵だろーがバカじゃねーの？
ま、どんな笛方か知らねーけどちゃんとやってくれよ
ちょっと着付けてくらァ
スッ
そ…そんな…
こんな……

こんなチンピラ
まがいの若造が
噂に聞いていたあの
阿国さんだなんて……

ゲンメツだ…

ズーン

すいませんね
山三さん

あいつ、口は悪いが
根はいい奴なんだ、
大目に見て
やってくれ

！

……座長

…國には、
共に歌舞伎役者を
目指してた双子の
姉がいてね……

といっても、
随分前に亡くなったと
言っていましたが

幼い頃から
二人で夢に向かって
頑張っていたからこそ、

あいつはその遺志を
継いだんでしょう

この座に来た
ときから、

舞台にたつ時は
女の姿でやると
言い張っていたんだ

やり方は多少
変わっては
いるが、

あれが、あいつの
夢なんですよ

●出雲の阿国座・完●

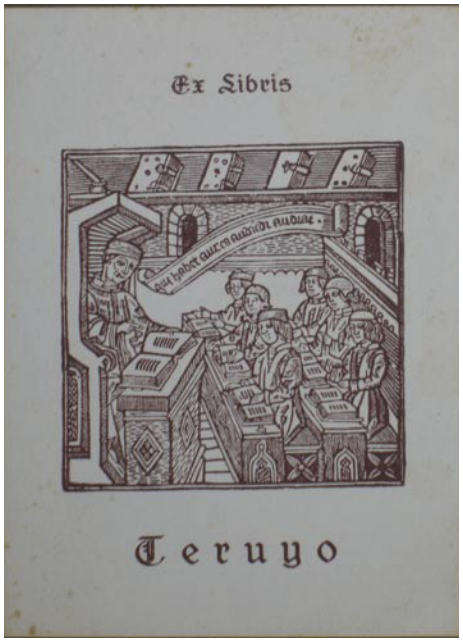
（ひらかわ・あや＝本名：山根彩／国文２年生）

紙の宝石

エクスリブリス（蔵書票）雑感

堀川照代

「織田信長とナポレオンと西太后の書票、三点セットで二億一〇〇〇万円」という好事家が喜びそうなフレーズが出てくる推理小説（木谷恭介『京都吉田山殺人事件』徳間書店、二〇〇三年）がある。新し物好きの織田信長が安土城を絵柄に狩野永徳に作らせた蔵書票百枚のうち、謀反にあう前日、茶道具を献上した博多の豪商・島井宗室に上機嫌で与えた一枚が現存している、という想定のもと、「紙の宝石」といわれる「蔵書票」をめぐる殺人事件を描いたものである。



「書票」あるいは「蔵書票」は、「エクスリブリス（EX LIBRIS）」ともいわれる。ラテン語で「誰それの蔵書のうちの書物」という意味で、絵や図案とともに書物の所有者名を記した紙片である。これを書物の見返しに貼って所有を明示するのである。

この蔵書票は、十五世紀のドイツで発生したといわれる。「EX LIBRIS」という文字と所有者名そして絵が描かれるのが原則で、木版画や銅版画で作成される場合が多い。絵柄は、紋章や書物関連の絵、所有者ゆかりの自然の風景や家や人物、寓話的・比喩的図柄、知性と学芸を象徴するフクロウの絵柄、アール・ヌーヴォー様式の絵柄など芸術性豊かなもので、二十世紀以降は、一般絵画と同様にあらゆる範囲の絵柄に広がってる。

それは単なる絵ではない。何より書物を愛する心が込められている。樋田直人は『蔵書票の魅力』（丸善、一九九二年）のなかで、「時には家柄や人物像など、あるいは友情や恋情、過去の人生、時として忠告や警告、モットーなど、様々な人間模様が、実は描かれているのである」（一九頁）と、蔵書票のもつ「美しさ」だけではなく「深み」を指摘している。

我が国では、現存する最古の蔵書票として京都の醍醐寺光台院（一四七〇年頃）のものがある。文字のみで書物の所有を明らかにしたもので、江戸時代中期まではこのように文字中心。江戸末期になって紋章を入れた凝った書票が見られるようになる。

これらの古典的なものに対して、現代的な蔵書票の第一号は、国立国会図書館の前身にあたる東京書籍館（TOKIO LIBRARY）の蔵書票といわれる。一八七五年か七六年に在日英国人の指導のもとに、和紙を用いて銅版画により制作された（約一〇〇×七一ミリ）。これには、「THE PEN MIGHTIER THAN THE SWORD」（ペンは剣よりも強し）の文字が入れられている。制作を発案した館長補・永井久一郎（永井荷風の父）の図書館にかける意気込みの発露であろうか。

蔵書票が我が国で一般的に紹介されたのは、一九〇〇年の『明星』（与謝野鉄幹主宰）誌上であった。日本に多色木版技法を習いに来ていたチェコスロバキアの画家エミール・オルリックが制作した蔵書票四点が紹介された。以来、明治末以降、川路柳虹、竹久夢二、平塚運一、中田一男、棟方志向、武井武雄、バーナード・リーチ、渋谷修、芹沢圭介などの作家が書票制作に活躍した。

現在では、本来の目的より、その芸術性から国際的に小版画として交換・収集の対象とされており、冒頭の推理小説のように、その価値ゆえに「紙の宝石」と呼ばれる。

新潟県弥彦村には蔵書票専門の「ロマンの泉美術館」があると聞く。ぜひ一度訪れてみたい場所である。

（ほりかわ・てるよ／図書館情報学）